第3回地域福祉計画策定ガイドライン研究会議事録(速報)

◆日時:　平成15年4月10日(木)13:30～

◆場所:　高知城ホール2階「くすのき」

◆出席委員:　上田　真弓(近森リハビリテーション病院ソーシャルワーカー)、新宮　玲子(特別養護老人ホームシーサイドホーム桂浜施設長)、瀬戸　節子(家庭教育ヘルプライン24電話相談員・子育て応援団)、高橋　正子(葉山村民生委員)、田中　きよむ(高知大学人文学部教授)、玉里　恵美子(高知女子大学社会福祉学部助教授)、中平　佳宏(宿毛市社協事務局長)、浜永　鈴美(日高村社協主監)、平野　麻喜子(高知県社協地域福祉課長)、堀川　俊一(高知市健康福祉部健康福祉担当参事)、松本　光司(特定非営利活動法人Brain副会長)、和田　善明(土佐町保健福祉課長)、元吉　喜志男(高知県健康福祉部保健福祉課長)

◆欠席委員:　板橋　靖(共同作業所ウェーブ所長)

議事内容　注:正式な議事録となった場合、発言内容が一部変更となる場合があります。

◆元吉保健福祉課長挨拶

4月から保健福祉課長になりました元吉と申します。よろしくお願いします。メンバーを見せていただいて、以前に私自身がいろいろな格好でお世話になった方もかなり混じっておりまして非常に心強い気がします。この会の議事録を昨日読ませていただたいたのですが、田中会長さんが冒頭の挨拶で「研究会ですから肩書を抜いて自由な方向で」ということをおっしゃっていただきました。2回目のときも「こういう方向でないといけないということではないので、あまり緊張せずに自由闊達な意見交換を」という言葉が随分心強く思っています。引き継ぎもそのように聞いておりますし、引き続いて活発な議論をしていただければと(思います)。私もなるべく早く慣れて議論の中に加わらせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

◆討議

○田中会長

第3回地域福祉計画策定ガイドライン研究会を開催したいと思います。前回まで高知県における地域福祉推進上の課題と対応上の視点ということで議論しております。各市町村が地域福祉計画をつくることを考えていくにあたって、高知県全体としてどのような推進上の課題と対応上の基本的な視点があるのかということで、全体の中でも基本的に重要な部分になるだろうと思います。前回は今日配られました資料の(イ)①の家庭をめぐる課題と対応、②の弱体化したコミュニティーの再建まで議論をしたということになっております。もし前回の議論の①と②に関しまして現時点で補足しておきたいというご意見がございましたら発言していただけたらと思いますが特にございませんでしょうか。今後話が進行する中で場合によっては、前とのかかわりでこの①②に戻ることもあり得るということを含んだ上で次に移らせていただきたいと思います。

③地域リーダーの発掘と育成ということで、地域福祉を推進していく上でのリーダーの発掘あるいは育成をどう考えたらいいのかにつきましては、その次のページをご覧いただいたらと思います。すぐに議論に移ってもいいのですが、ごく簡単にご紹介しておきます。板橋委員は、誰が発掘し育成するのか、あるいはそのためのニーズ調査や実態(の把握)が必要であるというご意見。新宮委員は、いろいろな福祉に関する組織、機関、資源を洗い出していく中で発掘できるのではないか。育成は各種団体の連携によって可能と考える。瀬戸委員は、地域で埋もれている人材を発掘するということです。例えば、教育研修や子育て研修受講者、あるいは運動会などに参加されている若い父親の中からも発掘、リーダーが生まれるのではないかというご意見。

それから私ですが、これも間違っていたら後でどんどんご指摘いただいたらいいと思いますが、民生委員ということはもう1つ重要な人材と考えられるわけですが、地域によって非常に積極的な所と必ずしもそうではない所があるのではないか。活動内容にも一定のバラツキが見られるのではないか。負担層や高齢化などの問題もあるのではないか。かたや各種のNPOあるいはボランティア団体はどうしても個別の活動に関心が集中して視野が狭くなる側面もあるのではないかということで、必ずしも当たり前のように民生委員とか役職の方をリーダーと位置づける必要もないのではないか。むしろ積極的に地域に入っていける人を考えればいいのではないか。それからよく地域全体を見渡せばいろいろなキーパーソン、あるいはその潜在的になり得る方がいらっしゃるのではないかということで、そういった人たちがそれぞれバラバラに活動されている状況の中である程度整理しながら、キーパーソンとなる人を明確にしていく。あるいはお互いが連携を取るための協議会のようなものを設けていくことも考えられるのではないか。さらに新たに公募したり、地区から推薦するということ考えられるのではないか。

玉里委員は、住民同士のワークショップや話し合いの場から発掘していくということもあります。中平委員は、地域リーダーの発掘と育成ということ。あるいは後のNPO、ボランティアの育成にもかかわると思いますが、事務局でまとめていただいた資料を確認しておく必要があるというご指摘です。後から簡単に見たいと思います。浜永委員は、リーダ

一の高齢化、固定化についてということ。平野委員は、座談会などでリーダーを発掘する。そして研修会で育てていく。さらに福祉だけに限定せずにある程度関心のあるもので広く捉える必要があるというご意見もあります。松本委員は、1つの事柄に対してかかわれる機会や場所を多く持つこと。それがリーダーの発見につながっていくのではないか。それからリーダーのリーダーということが重要であるということ。それを公的機関や民間で多く持っていく。スーパーバイザーみたいなことをイメージされているのかどうかなんですが、その上でさらにリーダーというものを考えていってはどうかということです。

それで中平委員のご意見にありますように、「検討テーマを協議するにあたっての参考資料」は、後のほうにもかかわりますのでざっと見ておきたいと思います。23ページをご覧いただきたいと思います。整理していただいておりますけれども、例えば市町村社協の職員体制ということで、地域福祉コーディネーターあるいはボランティアコーディネーターが市町村によって社協で置かれている所とそうでない所の差があります。置かれている所は地域福祉コーディネーター、ボランティアコーディネーターが11、14という市町村になっておりまして、全体からすれば5分の1程度で配置されているという状況が伺えます。それから右側の登録ボランティアということで、ボランティア活動そのものを目的としている団体で見ましても、市町村によって多く団体がある所と全くない所と差があります。伊野町のように43団体もある所もあれば全くないという所もあります。こういう一定の格差が見られるのではないかと思います。

25ページ、26ページはNPO法人として認証された団体です。高知県全体でこのような福祉だけではなくて、社会教育、まちづくり、文化、環境、その他、もろもろの目的を持って活動されています。27ページは、私どもが2001年に高知県のボランティア団体およびNPO法人を対象にしてアンケート調査をさせていただいた結果です。Q2の所にありますように活動領域として保健・医療・福祉が過半数を占めている状況です。29ページをご覧いただきますと、その中で働かれているスタッフで有給で常勤を持たれている所は非常に少ないです。有給で常勤0人が88%ということは、逆に言えば有給の常勤職員を配置しているのは12%にすぎないということになります。

それからその下の表5を見ましても、スタッフがいないとか、常勤ボランティア無給、あるいは非常勤のボランティアのみというかたちで必ずしも有給職員を置いているという状況はむしろ少数派と言えます。それからスタッフを男女別に見ますと、Q7の2にありますように女性が約半数を占めております。それから右側の団体リーダーにどういう職種の方がなられているのか問うたわけですが、自営業。それから⑦にありますように最も多いのは主婦で、退職高齢者が多い状況というのがございます。その下の活動経費ですが、だいたい100万円未満ということで見ますと、①から⑤まで足すと73．8%。7割ぐらいの団体は100万円未満の活動経費という状況が見られるということです。これがリーダーの発掘と育成に関する皆さんのご意見と、次にも関係するものとして参考資料をざっと見ました。

そこで皆さんから自由に、どのようにしてリーダーを発掘するのか、あるいはそういった人を育てていけばいいのか。やはり地域福祉を実際に推進していく上の要になるような人。皆さんの今のご紹介したご意見に対する相互質問でも構いませんし、それぞれ各自の書かれたことをもう少し広げながらご意見を披露していただけたらと思います。どんな人がリーダーになるのがいいのか。リーダーとして考えられるか。あるいはその人たちをどのように育成・支援（するか）ということ。それぞれいろいろなお立場でご活躍されていますから、こういう人はリーダーとして頑張られているなということをよくご存じだと（思いますし）、皆さん自身がリーダーでもあると思いますが、どうでしょうか。

〇玉里委員

いろいろな地域を見させてもらってリーダーになる資質の方はいるだろうと思いますし、素晴らしい方にも出会います。誰がその方をリーダーとして認めていくのかというところで、ちょっとここからは入りたくはなかったのですが、行政があえてそういう方をリーダーと認めないような雰囲気とか。いろいろと事例はあると思いますが、女性のリーダーなんかも含めて、地域の中では非常に頑張っておられるけれども、例えばそれを町全体に引き出して、その方にいろいろとやってもらったらもっといろいろと変わっていくのかなと思っても地域の中でたたかれてしまうとか、あるいは押さえられてしまうとかいうことを背負っておられた方も私も知っておりますし、なんとなく芽を出せない。あまりこの辺からは入りたくはないのですけれど、頭を出しにくいとか、そういうことは多少あったのではないかと思います。

私は自分の意見の所からやりますけれど、選出型のリーダーではなくて本当に動ける人が出てくるためには、実は住民のたちのほうがそういったリーダーの必要性とか、あるいはこの人はリーダーでこの人なら付いていきたいと思うような人はいるんだろうけれども、それに対して合意ができないということがあると思います。ワークショップとか住民同士の話し合いの中からそういった人材が自然に出てきて、さらに力が発揮できるようなシステムにしたいという漠然としたイメージを持っています。伸び伸びと本当に地域のことを考えてやれる素質を持った方が認められるような雰囲気づくりとか、そういうのが必要だと思います。

〇田中会長

多分具体的なことをイメージされながら抑えながら発言されたのではないかいうことですが、事務局のほうでハラハラするほうが面白いというご指摘もいただいていますので、結構言っていただいてかまいません。要するに女性がリーダーというのはどうか、やはり男性ではないかという意識が根強いということでしょうか。

〇玉里委員

そういうこともあったようですし、それからどうしても肩書がついている人の所へ行くというのがあると思います。地域の中で有力者であるとか、この肩書という指摘をされたり、今まで活躍されて来られた方というのは組織の長であるとか、あるいは何らかのかたちで地域有力者ということになってくると思いますが、その方々を乗り越えて本当にまとめ

ていける方々がなかなか前には出られないというのはあるのではないかと感じます。

○松本委員
今のご意見ですが、確かにそういう場面があると思います。何かすごく地域で頑張っているのに肩書がないということで、今までは本当におうちにいた方ということで、そういうことでリーダー的な要素を持っていながらリーダーになっていない方はいると思います。ただやはり僕のような若い者から見せてもらってやはりバランスのとれたリーダーも必要になるのではないかと思います。冷静に見ていたら時々見えるのですが、いいことをやっているんだよと、自分の思いだけを押しつけて周りが見えていない人。そういうのではやはりリーダーはできないと思います。大金持ちで施設も全部つくってお給料を払ってできる人ならいいですが、補助金だって必要になる場合もあるでしょうし、そういうときにやはり顔の利く人、名前が通っている人というのが必要な場合も出てきます。それは多分ケース・バイ・ケース、バランスの取れている人が一番リーダー的な資質を持っているのかなと(思います)。
ただ組織を見ていてトップを取らなくてはいけないのかと(思います)。リーダーは一番頭(かしら)にいる者だけがリーダーというところが僕はいつも疑問です。やはり組織の中でいろいろな役目の人はいると思います。お役所の人と話のできる人は渉外的な役割を持てばいいし、いろいろな部門があると思います。その中でそれぞれのリーダーというのを組織はつくっていかないといけないものではないかと思います。どうしてもやはり団体なんかでよく人事のもめ事を聞いたりすると、要はトップを取るか取らないかというところでもめていたりしています。せっかくいいことをやっていても、たかだかそれくらいのことだと思います。本当にやっていることの中からしたらリーダーになるか、ならないか、役職がつくか、つかないかというのは、そういうことでもめ事を起こして活動が止まってしまうことのないような組織づくりができる何か方策を取っておいてあげないといけないのではないかと思います。

○田中会長
周りが見えるということ。自分ではそのつもりでも見えていないような人はちょっとどうか。あるいはトップということではなくて組織の中でもそれぞれの役割に応じたリーダーが考えられるのではないかという意見です。今度は今のお二人の意見にかかわっていただいて、あるいは別の意見でもかまいませんが、中平委員、高橋委員、浜永委員はそれぞれの地域の中で地域福祉に取り組まれていると思いますが、そこら辺から何かご意見をいただけたらと思いますがどうでしょうか。

○浜永委員
高知市と町村とは違うと思いますが、私がここに書かせていただいた事は日高村のことということではなくて言わせていただきます。本当にいい人材はいるのですがなかなか頑張っているリーダーがいまして、どうしても若年層のリーダーが育たない。先程の松本委員の意見にもありましたけれど、リーダーというのは長だけではなくて何か役割を持ってやれる人がいるのに、なかなかその人がなれてないのではないでしょか。本当はそういうことではいけないのでしょうが、そういうことが実際はあります。どうしても「あっ、この人いいな」という人材を見つけてもなかなかその人がリーダーとして活躍できない現状が、私としては課題といいますか、問題ではないかということです。また何十年もリーダーをしてきていて、高齢になったり、固定されているといったことが今私が考えたときに問題かなと思いましてここに挙げさせていただきました。

○田中会長
ちょっと言いにくいことをおっしゃられましたが、その人にしてもらわないといけないという雰囲気というのは、先程、玉里委員がおっしゃったようなある一定のしがらみでやはりこの人を立てないといけないみたいな、こういう雰囲気がありそうだと。

○浜永委員
郡部に行くとどうしてもあるんじゃないでしょうか。

○田中会長
なるほど。そうでしょうね。

○中平委員
やはり宿毛でもH(浜永)委員がおっしゃったような事例は多々あります。松本委員のおっしゃられたトップに立つだけがリーダーかというのは、非常に共鳴する部分がありまして、まさにそのとおりではないかなという思いがいたします。ポスト争いとか、そういうところで活動の足を引っ張るということがたくさん見えるのが現状かなという気がします。私はこの項目、地域リーダーの発掘と育成というのをイメージしたときに、地域リーダーということですから1つは田中会長が書かれていますように保健師だとか医師だとか、専門職としての人材。2つ目としては中間に位置するボランティア、NPO、民生委員もここに入ると思いますが、中間的な階層にある方々。そしてもう1つは例えば痴呆(ちほう)を持つ家族の会だとか、いわゆる当事者というグループ。そういう3つの枠組みが頭の中に浮かんできたのです。やはり地域リーダーとイメージしていくと、どうしても中間にあるボランティアのグループであったりNPO組織であったり、いわゆる民生児童委員。住民の立場に立った地域のリーダーとしての代名詞というところが非常に頭に浮かんできたので

す。資料の中にもありましたが、10万人当たりの民生児童委員数は高知県が全国で一番というところもあります。これはやはり地理的な問題も関係はしていると思いますが、やはり地域での活動のリーダーを考えていくと、どうしても民生児童委員が私のイメージの中ではすごく強く浮かんできます。その民生児童委員を核としていろいろな専門職集団やボランティアのグループやNPOとどういうふうに連携を取っていけるのか。リーダーとしてどう連携を取れるのかというところも非常にリーダーの資質として大事な部分ではないかと思います。日ごろはリーダーシップのワンマンぶりというのが非常に地域の中では気にかかっております。

○高橋委員
民生委員というのも「地域で」ということはなかなか自分たちも気がつかないというところもたくさんありまして、田中会長が書かれていますように仕事も多様化されて十分に活動できていないところがあります。地域でリーダーを育ててもらえるとそこに連携が取れる保健センターとか医療、社会福祉協議会までつながるというリーダーであって欲しいと（思います）。地域で人望という大きなものではないのですが、その人なら誰でも声がかけられるというような人格の人だったら、大きなリーダーではなくてもNPOのボランティア、民生委員、福祉委員の中でリーダーで頑張ってもらえる人が地域にはおいでるのではないか。そういうふうな人と仲良くしながら民生委員活動をさせていただいて、社協へつなぐ、保健センターへつなぐ、医療につなぐという大きな輪ができたらな、そんなリーダーをぜひと考えています。

○田中会長
その場合、例えば葉山村でそういった地域でリーダーを育てる、誰にでも声をかけやすい人ということで福祉委員とおっしゃいましたが、その場合、先程少し議論になりましたそういった人をどんどん押し上げていける雰囲気は、例えば先程のようなしがらみ的なものどうでしょうか。ないのでしょうか。

○高橋委員
やはり老人クラブなど、そういう高齢者にはまだリーダーの座のこだわりがあるみたいで、もっと若年のほうには「3年間に1回リーダーが変わっていくよ」「マンネリ化するからどんどん変わるよ」という傾向があるのですが、やはりしがらみではないですが、「また今年もリーダーさんなが？」という人はいくつかの団体でも同じようにリーダーだったりするのです。地域で声がかけられるような人は、自分たちが勉強している中で何度か顔を出してくれたり、勉強会で一緒に勉強してくれるような人に「今度は福祉委員さんをお願いしますね」行政や社協が推薦ではなくて、地域の中から名前が挙がってくるような地域リーダーに葉山ではお願いしています。

○田中会長
やはり地域の中から自然なかたちで出てくる、あるいは地域の中から選ぶということ。必ずしも決まったように決めなくてもいいのではないかということ。あるいはトップへのこだわりを解消していったほうがいいのではないかということ。おそらく男性の場合は特に現役のときの意識というのは、私もいろいろな地域へ行きますと、退職しても何ら中の役職という肩書がついていないと落ち着かないのでしょうか。それがまたそういう人がトップに来るという循環があるような気もします。
それから中平委員がおっしゃったように、例えば専門職的なレベル、それから中間層、それから当事者的なレベル、こういった区別も考えられるのではないということです。私（の意見）に関してもご意見がありましたので少し述べさせてもらいますと、私もいろいろ専門職的な人も並べておりますが、1つには調整役としてのリーダー、いわゆるコーディネーターと言いますか、こういった人がやはりいる必要があるのではないか。それからより実働的な、要するに調整役というよりも推進役としてのリーダーが各地域にいらっしゃると思います。あるいは中平委員とは別の意味の3つの次元なのですが、地区というよりも例えば町会くらいのエリアの中で、数人単位で「一緒にボランティアをやろう」ということで（ボランティアの）仲間を作って実際にやっていく。もっと少人数の中でのリーダー的な人といいますか、そういうふうな実働的にやるリーダーでも、少し広めのエリアでもあれば、もっと少人数でやっていく場合のリーダーというのも考えられるかもしれないということを申しておきたいと思います。今の意見、私も含めて反論とか何でも率直にご意見をいただけたらと思いますがどうでしょうか。

○平野委員
福祉の問題ではなくて関心のあるものをもっとテーマに絞って自分で気楽に参加できる場があればということで書きました。食べ物の関係で食事の作り方とか食の健康とか、何か1つでも関心を持てるようなことで人を集めていくということもあってもいいのではないかと考えました。地域で子どもを育てる「声かけ運動」とか「お父さん、お母さん学校へ行こう」というキャンペーンの展開など、「地域で子育てサポートしませんか」とか、何かもっと身近にできる問題で人を集めておいて、リーダー的になる人を探していくという中で徐々に福祉へ関心を向けていくということをやっていくのも面白いのではないかということで書いています。

○田中会長
今のご発言は女性的と言うと語弊があるかもしれませんが、男性のようにすぐ組織へ、そしてその上のトップへという発想ではなくて、私もいろいろな地域で（女性が）非常に面白くスムーズに、しなやかに、あまり誰が上でどうこう考えずに非常に楽しんでやられているなということは（感じていました）。女性はあまり上下を考えずに、今平野さんがおっ

しゃったように関心のあること、自分のやりたいことを自然発生的にうまくやられているような場面をよくお見かけします。

○玉里委員

先程、行政が選出しないというふうに言いましたが、けっして行政が関与しないというわけではなくて、平野さんにも後でつながってくるところなんですが、行政はだいたいリーダーが出てくるまで待てないのです。要するに年度予算で何かをしないと委員会をつくらないといけないとか。すぐ指名して入ってもらわないと会が開けないという。福祉関係でなくてもどんな会もそうです。例えば子育てのグループをしましょうとか、あるいは高齢者の見回りをやっていきましょう。これから私の町でもやっていきましょう。だから集まってくださいね。2年たっても、3年たってもいいから出てくるまで待とうというのがないので、どうしても今おられる人材の中からというのがあると思います。社協もしかりかなというのが（あります）。熱心な社協ももちろんあって、一概には言えませんけれども、やはりそうやって何かするとなったらいきなり組織をつくって、かたちをつくってというふうになりますよね。そうではなくて、もっとゆったりと待てるとか。

例えばいくらリーダーが住民の中から出てくるようにと言っても、その仕掛けをするのは誰か。一番初めに投げかけでそういう場をつくるのは（誰か）といったらやはり行政や社協が役割を担っていくと思います。それなしにはなかなか自然発生的には場というものはできていかないわけです。そう思うと行政や社協の意識改革と言うのでしょうか、リーダーが出てくるまで待てるかどうかとか、本当はいるのにその人が出てくるまで待てないとか、あるいは社協とか行政自身が見守れていないとか。そういうことはあるではないかな（と思います）。それを私は全く批判だけするのではなくて、やはり今はそういうことができない仕組み。年間予算がついていてこの委員会をしなくてはいけないとか。そんなものをゆったりと待つというか、そういうものの中から出てくるのではないか。そういうイメージで私も先程行政の選出ではなくて住民同士の話し合いと言っております。

○新宮副会長

今、「仕掛け」とおっしゃいましたが、私は（エ）でいろいろな地域の各種クラブとかそういうものの中からできる、次によさこいピックのボランティアの組織づくりが参考にならないだろうかと書かせてもらいました。まさによさこい国体があって、その後によさこいピックがあったときのそれは、ある意味で仕掛けになると思います。そのときに上田委員が委員長として3年間された中で、そういう大きな何千人という組織ができてよさこいピックのボランティア委員会が成功したという事例がありますので、よろしかったら上田委員からどういうふうなかたちで、ある意味で大きな全国発信できるような組織づくりになっているわけですが、何か言っていただいたら参考になるのではないかというふうに（思います）。やはり仕掛けという意味では多様化している中で1つのことで地域がリーダーを求めてやっていこうということはなかなかないと思います。そういうふうに1つあったことに対して事例として言っていただいたらイメージがもっと沸いてくるのではないかと思います。

○上田委員

遠くに終わってしまったよさこいピックのような気がしますが、私が委員長で「OSK深海の恵みは」というかたちで、「私にできることは何かな」ということで、（コマーシャル出演の）話が来たときに受けました。自分がリーダーをやっている意識は全然なくて、逆に私にできないことが多いからみんながやるという意識が強くあったのかなとすごく思います。よさこいピックで言うと、本当に自分たちがやろうという気持ちをみんながどんどん高めていきました。限られた施設的なものであるとか、財源的なものであるとか、そういうものの中でいかに大きな大会を成功させるかというところでいくと、やはり人でないと補いきれないという部分に、みんながそれだけは共通の認識をしていたというところはすごく大きかっただろうなと思います。そのためには自分が1人でやりきれないというものもみんなの中にあって、ではみんなと協調性を持ちながらやるには自分がどう働きかけるかということもそれぞれの中につかんでいったものがあるのかなと私は思っていました。

もちろん私が率先して車いすをガンガンかき上げるとか、人道的に動けるわけではもちろんなかったからそういうことはこの人がやれるとか。それぞれの分野で自分のできることを発揮できる場を、それぞれがポジショニングできていて、そこで自分には何ができるかというところをアピールするのです。それで自分にできることを「私はなんだろう」ということをそれぞれが思っているし、その中では自分自身の力量を見つめられる機会があって、そこに自分が足を運んでいってという長い期間の中で委員会は2年半くらい前からありました。よさこいピックボランティア委員会という、本当に手挙げ式で集まった委員会が最終的にいうと2年半やる中で、当日ボランティアの大人数をまとめあげるには、自分たちがどのような働きかけをすればいいかということを、長い期間をかけて本番を迎えるまでのプロセスを考えていけたから、それに当日、突然やってきても一緒にやれるという、本当に当日ボランティアはそれまでの経過があるわけではないので、そこの部分で多分乖離（かいり）がなかったのです。いろいろな働きの中で。だから当日のボランティアたちを委員会の誰かがリーダーシップをとって運営するわけです。

春野運動公園であれば、どのリーダーに当日ボランティアがついていくかというかたちで、島をつくっていたようなかたちでやっていきました。あの場合はボランティアをしなれている人が多かったので、ボランティアをやろうと思った人たちが仕事がなかったらボランティアはこんなものかと思うし、つまらない思いをさせたら後々につながらないからボランティアの人数もどれくらい必要かというところからすごく考えたのも確かです。ボランティアが朝から晩までゴミ拾いばかりをする。それも多分あきるだろうし、つまらないだろうなと思うから、それだったらその人が1日の働きの中でゴミ拾いだけではなくていろいろな分野のことができる仕組みをつくったほうがいいだろうということとか、ボランティアをする

ことでがっかりするという、後々「ボランティアなんて二度とやらないぞ」というような気持ちを持たさないようにしようねというというところに一番気を配りました。

○田中会長

非常に参考になるご意見だと思います。私なりに理解すれば、上田委員は実行委員長ですから、いわばコーディネーター役の人がいてつまらない思いをさせないように、それぞれが何らかの活動ができるようにコーディネートして、その中でさらにこの人はこのボランティア、この人はこの仕事ということで、さらにもう少しきめ細かな部分で実際的なリーダーがいらっしゃるということでしょうか。それをうまくポジショニングされるということで、先程の松本委員がおっしゃったように、必ずしも組織の上下ではなくて、それぞれの得意なこととか、この人ならこれができるということでお話がありましたが、そのポジショニングを考えてそれぞれがまたそれが実際のリーダーとして活躍されるということでしょうか。

○松本委員

私はよさこいピックにはかかわれなかったのですが、上田委員が言われたように、日にちが決まっている、この日にやる、この日にこれだけの成果を挙げるというときの実行委員会はそれがうまくいきます。ただ組織を組んで地域でやっていくとなると、いつ何が起こるというのが分からないのです。半永久的にずっとやり続けていかなくてはいけないじゃないですか。組織を組んでしまうと、「もう、やめた」と言うまでは。そんな中でやはり先程から頭が変わらないとか、リーダーがずっと同じ人とかというのもやはりうなずけるところもあるのです。リーダーが変わらずにずっとやっているとその人たちがやりたくて立ち上げたものなので思いが強いのです。求心力もあるしどんどん前に進んでいく力があるので、変わらないというのがいい場合もあると思います。もっともこういうのもあると思いますが、最初にやり始めた人は思いがあって強い、こういうふうにしてやっていこうというのがあるのでそのときはいいのですが、代がかわって、2代目になると「最初にやり始めた意味は何だったっけ」というのが分からなくなってくるのです。そうすると先程中平委員がおっしゃられたポスト争いが始まってきます。一番頭に就きたいというようなのがどんどん始まってきます。そういう意味で長く座った場合がいい場合も悪い場合もあるし、やはり変わったほうがいいのではないかという部分もあります。多分、僕らも今は変わったほうがいいと思っていますが、年齢を重ねていくうちにやはり(自分が)なったほうがいいのではないかときっとなると思います。誰かに任せるよりも自分でやったほうが早いなと思いますし、やりたいと思っていることをやれるじゃないかということになったりします。その辺をうまくバランスをとってやれる人がリーダーになるべきだし、また組織という意味で考えたらそういう人が自然となっていくような組織でなければ、一時期のものかなと(思います)。ここ何年か阪神大震災以降のボランティアのブームに乗っていろいろな団体が立ち上がっていますけど、今は確かにブームの中ですけど、これが20年、30年とか50年、100年という単位で考えていくと、やはりそういう不自然な交代が起きない程度の内容のものをやっていくことが。その「程度」と言い方は変かもしれませんが、そういう程度のものであればやはりそんなに長いスパンで見る必要もないのではないかと(思います)。だから1人のトップでやれるだけやって、「はい、お手上げ」というところまでやればいいのかなとも思うし、その辺はさっきも言ったように、やりたいこと、やっていること。団体の持っている性格とか地域の持っている現状によってケースは多々あると思います。やはり多くの人に押される人がリーダーになるべきだと思います。それが行政主導であったり、民間主導であったりというのはそのときそのときで分かりませんが、民間の人が1人反対する人でも100人の行政マンがいいという人ならそれはそれでいいと思います。やはりたくさんの人に押される人がリーダーになっていくべきだと思います。やりたいと手を挙げる人よりもやはりあの人にやってもらったらという人がリーダーのほうが(いいと思います)。またそういう人がリーダーになるとたくさんの人が動ける場合が結構多いので、先程上田委員が言われたように「私はリーダーをやっていたという意識がなかった」というのが一番いいリーダーのかたちだと思います。みんなにやってもらっているという。やはり私がやると手を挙げた人は、結構周りを見ないで自分だけでどんどんやっていく人が多いのでそういうところが見られるようなシステムづくりがあったほうがいいかなと思います。

○田中会長

例えばイベントや行事的な場合のリーダーと地域の中で恒常的に地域福祉活動をやっていく場合は一定の違いもあるだろう、あるいは必ずしも長くやることが悪いとは言えない場合もあるというご意見もありますね。ただ今の松本委員のご発言にかかわって、ひょっとしたら「あの人に任せておいたらやってくれるだろう」という住民側の意識も場合によってはあるのではないかということですね。それは場合によっては住民が地域を自分たちのものと考えていない部分があって、何かそういうことならあの人にやらせておいたらいい(というのは)それはひょっとしたら自分を主人公として自覚していない、あるいは地域のことを主体的に捉えていないからこそ、より多くの人が担い手として育っていかずに特定の人に偏ってしまうという場合もひょっとしたらあるのかなという気も私自身はなんとなくします。

○元吉委員

初めての出席ですので少しポイントがずれるかもしれませんが、いろいろなお話を聞かせていただいている中で、例えば玉里委員が行政サイドのお話をなさいました。われわれは行政のサイドからものを見たり、この会も先程言われたことの1つだと思いますが、そういう場合が多いのですが、肩書を外してということですのでお話をしますと、1つはやはりリーダーとシーダーという種をまく人のようなもの。これは先程松本委員がおっしゃったけれども必要かもしれないです。種をまいて本番は黒子にいながら、先程上田委員が言われたようにいろいろな方々が場面の中ではかなり

活躍している。けれど種をまいた人は、結構いろいろなことの細かい神経も含めて考えながらやっていく。具体的な事例で私は現場が好きなものですから行って、昨年まで僻地（へきち）医療をやっておりました。そうしますと診療所で僻地医療をやっているドクターがいます。それから保健を抱えていますと保健師は健康相談などでいろいろ回っています。それから社協の方々とか地域コーディネーターの方々とお話をするとヘルパーの方はそちらの情報を非常に持っています。その分野、その分野は随分高いレベルで動いているのですが、地域全体になったときにそれがうまく連鎖しているかというと、動いているかなということがございます。

これくらいの地域でボランティアを使いながらやっている方だったら当然医療のことでドクターとお話をされているのかなと思うと、その方から聞いたのは「いや、ドクターは2年か1年前ぐらいに代わってきた人で、なかなかそんなことを飛び込んでお話しするようなことはちょっとできません。機嫌でも損ねられたら大変ですから」みたいな話がありました。人にもよりますがそういう部分がまず先入観としてあるかもしれません。

ドクターの所へ行きますと、「保健や福祉のことは情報として、ときどきこの地域はどうしているか話したりする？」と言いますと、「いや、僕もやりたいんですけどなかなかその機会もありませんし、自分も忙しいから自分からアクセスして行くようなこともしていません」という話があります。そこの場合の保健師は若い人でしたので、自分でどんどん動くという状況よりも上司の指示を受けてという状況でした。そこでこの町全体の今後のことを一緒に考えるようにワンテーブルをつくってみたらどうかということを思いました。「ドクターには話しておきますので、一度話しに行ったら乗ってくれるんじゃないの」という話をしますと、数日後に（連携をとるために）アフターファイブに（飲み）会を持ったそうです。

あるおばあさんの事例があります。その人は一人暮らしだった。ところが医療のドクターは腰が痛いとか、どこが痛いということですから湿布薬とお薬をきちっと渡して、看護師さんが説明して帰されました。それは院内ではパーフェクトな仕事をされている（のだと思います）。ところがその方が帰られたときにどういう暮らしをしていて、どういう状況でその薬に対応しているかということに関してはよく見えていないわけです。ここら辺が先程の連鎖ということで考えますと、プライバシーのことがありますからあれですが、その方に対してあるちょっとした情報を持って、そのことを注意して見れば、その人が一人暮らしで湿布薬は1人ですから柱にこうやってこんなになって貼ってといるというのが今の実態ですと。看護師さんに薬もきちっと説明されたのですが、朝になって（薬を）こんなにたくさんもらってどれがどれだかよく分からないから飲まないでおこうと置いてあるというのですね。そんな情報が例えば診療所にきちんと伝わって、それで見ていくときっと彼のコメントなり今後の看護のことというアドバイスが変わってくるはずです。

それから回る方々にしてみれば、「あの方はこういう状況ですからこういうことを少し注意してみてあげてくれませんか」というコメントがあると、保健師やその方がかかわっていく部分が違うかもれません。それから肩が痛いということも実際に現場に出ていきますと、農作業をやっていて、こんなに棚があって高い所をやって低い所をやってそのために痛かったとすると、そこはちょっとした安定した台をやるか、むねを切ってやれば同じ高さで全部できて、肩のこりが解消できるということがあるわけですね。それは1つの事例ですが、1つはやはりシーダーという（話と）横の連鎖が必要かなと（思います）。それともう1点、先日あることである町や市にお願いごとがありました。そのときに誰にお頼みするかということで、知っている所だったらさっと行くのですが、役場の某課長に（電話を）かけますと、「忙しくてとてもできません」という話が出ました。民生児童委員で以前知っている方ですごくアクティブな方がいらっしゃって、その方に言うと一度で話が広がりました。そういう意味で情報が集まって、先程気安く声をかけられるというお話が出ましたが、そんな部分のところに限られた情報ではなくていろいろな情報がいろいろな角度から集まっていける方と言いますか、そういうのもファクターの1つだと思います。私の思ったことの感想です。

〇田中会長

リーダーとシーダー、種をまく人。今のお話ですと場合によっては最後の例の方、あるいは医師や保健師も潜在的には種をまく側、シーダーになっていく可能性もあるということでしょうか。ところが実際には地域の中に医者が入っていかない場合、あるいはなんとなく話をしにくい、ワンテーブルに着かないということで、保健・医療・福祉の連携ということにかかわる非常に重要なお話だと思います。そういう意味で堀川委員、上田委員どうでしょうか。保健・医療・福祉の連携のお話がありましたが、それに限らなくても何でもお話しいただけたらと思います。

〇堀川委員

元吉委員の言われた保健・医療・福祉の連携は以前私も小さな村でやっていたことがありますので、なかなかできるようでできないところといいますか、いろいろと苦労した覚えがあります。今日のお話の中でリーダーの固定化は高知市でも本当におっしゃるとおりで、多分ほかの地域と全く同じだと思います。民生委員も町内会長も社協の会長もというかたちで同じ人がやられていることがあると思いますが、一方で高知市の場合は抱えている人口が大きいので、おそらく埋もれている人材はほかの地域よりは多分多いと思います。ただそれがマンションに代表されるように匿名性が高い中でその埋もれている人をどうやって発掘するのかというところが1つの大きな課題なのかなと思います。それともう1つ、この場合のリーダーがどこまでやられる人なのかがよく分からないのですが、行政のようなものはある程度長く続かなくてはいけないし質も保たれなくてはいけない部分があると思いますが、やはりボランティアやNPOに関して言えば、ある意味でダイナミズムなかたちで生物と同じように発展してまた落ちていくというのは自然的なものであるし、けっして悪いことでもないと思います。もちろんそれが大きく育っていって恒常的に代替わりしていくのは一番ベストなのでしょうけれど、子育てのサークルを見ていても思うんですが、やはりそれを残していってもらうことを考えるよりも、次から次へ立ち上げたほうが効率がいいと言ったら変ですけれども、なかなか代替わりというのはうまくいかないなと感じているところもありますし、それはそれでどんどん変わっていくのも1つの方策かなと（思います）。

〇田中会長
　高知市の場合は、ある程度高知市全体ではなくて地区ごとにいろいろな地域福祉を考えられているのではないかと思います。それから地域福祉コーディネーターをモデル的に配置されて、今活動されているわけですね。そういった地域福祉コーディネーターを置いていろいろの人材を発掘したり活動を活発化させたりするのは1つのきっかけに考えられているのでしょうか。

〇堀川委員
　やはり1つは行政のほうで例えば公募して何らかのというので公開される方法でしょうけれども、やはり地域の中に入っていって埋もれた方を見つけるのが本当は一番いいと思います。そういうかたちで言うと、高知市の場合は地域福祉コーディネーターをモデル的にやっていると聞いていますけれども、まだ成果が出ているというほどのことではないみたいに思うのです。それともう1つはよそでも同じだと思いますが、地域福祉はすごく広いと思うので、今は特に南海大地震の関係で自主防災組織づくりということをどこでもしておられると思いますが、高知市の場合は小学校区単位でコミュニティー計画をつくっていただくということを10年くらいやっています。市内で30くらいの地域でコミュニティー計画ができていますので、住民の側から見ればこれに「また地域福祉計画をつりませんか」と言われたら、この前はコミュニティー計画をやって今度は自主防災組織つくって、最初の会のときに「行政の縦割り」という話もありましたが、まさにそのとおりで、防災は別の組織です。だからまた別の課からコミュニティー計画推進となりますので、その辺はいずれも1つの大きな意味での福祉、われわれから見れば全部福祉ではないかということで、無理にそれを地域福祉計画と呼ぶ必要はないかなと（思います）。コミュニティー計画であっても地域福祉的なものが含まれていればそれが地域福祉計画でしょうし、多分、自主防災組織づくりを進めていけばその中で地域の高齢者、障害者は当然、かたちだけつくるだけではそれで終わりになるでしょうが、本当に進めていけばやはりそういうことが出てくるのではないか（と思います）。

〇田中会長
　今のお話は今後の議論にもかかわっていくかと思います。そういった本当にコミュニティーとして自分たちがこのエリアで考えていくというのがしっかりしていればそれが一番基本になるのではないかというお話ですね。やはり地域の中から出てくればいいという（ことです）。

〇玉里委員
　地域の中から出てくるということで、私もそれは先程言いましたけれど、1点だけ、社協の平野委員に教えていただきたいのですが、これだけ市町村社協でも地域福祉コーディネーターとかボランティコーディネーターの重要性が言われていたにもかかわらず、このように設置が低いのはなぜか。その辺を少し整理して、地域からもちろん出てくることも重要で今日はその議論になってしまったのは、田中委員は多分もう少し専門家ですね。既存の専門の人がどういうふうな機能を持っているのかというのも今回話し合ったほうがよかったのかなと思っておりますが、社協における地域福祉コーディネーターなりボランティアコーディネーターの設置で高知県は今どういう現状にあるのかをお話ししてください。

〇田中会長
　ひょっとしたら「ふれあいまちづくり事業」も関係しているかと思いますが、どうでしょうか。

〇平野委員
　この表に出ている地域福祉コーディネーターは国の「ふれあいまちづくり事業」を受けたときに、地域福祉コーディネーターの設置の人件費的な補助があるので、その兼ね合いでの人の配置になっていると思います。ですから事業を受けていない所で地域福祉コーディネーターを独自で設置している所はこの表ではないと（思います）。ボランティアコーディネーターもこの表はボランティアセンター事業を受けられた個所数が出ていると思いますが、それぞれ市町村ではボランティアセンターが市町村の社会福祉協議会の機能の1つとしてありますから、それぞれボランティアコーディネーターということで担当の職員を置いてやっているのが事実です。ただこの表に出ている部分の数としては、「（ふれあいまちづくり）事業」を受けた数ではないかと思います。

〇田中会長
「ふれあいまちづくり事業」は5年間で、終わった後も継続してやられている地域もありますね。それはやはり行政との話し合いなどでそのまま配置を継続するというかたちですか。

〇平野委員
　そうです。結局その事業評価ということで、行政がその事業を受け皿にした上で地域が変わってきている必要性、地域福祉コーディネーターを引き続いてその地域福祉に当たっていただくということで設置されているのが現状です。自分たちが「ふれあいまちづくり事業」を受けることによって、市町村社会福祉協議会の活性化、またはそういう部分も出てきておりますので、この事業自体は大いに評価をしております。

○上田委員
　私が近森（病院）で働くようになったときに、私の直属の上司は県社協でやっておりまして、すごく社協を愛している人でした。福祉を勉強していくときに、社会福祉協議会はどういうものかを一番に勉強するわけです。社協がどういうふうに働くか、その機能を知っていったときにこれはすごいと思ったわけです。53市町村のあらゆる所から患者が来たときに、各市町村の状況が分かっていく中でやはりそれは理想論と現実のギャップが大きくあります。その中で本来、社協がやらなくてはいけない、やってほしいと言われていることができない理由が各市町村にはあるわけですよね。それがいったい何がどうなればそういうのがいくのかなということを私もすごく思っていまして、それがどこの分野で何がどう解決すれば社協が理想論により近いものが現実のものになるのかというところがすごく率直な疑問です。

○田中会長
　現実はどうでしょうか。

○瀬戸委員
　地域福祉とは自分が今まで過ごしてきた中で関係なく、自分の家族だけの生活を守ってきたような過ごし方をしていて、地域との密接な連携とか、かかわりもないままに（きました）。転勤族が多い地域でもありますので、人のことにかかわって長い間お付き合いを築いて、いい町づくり、町内会づくりをしていくという必要性を全然感じられないような過ごし方をしてきたものですので、恥ずかしいのですが社協とは、民生委員とはという仕事の内容も全然分かっていないのです。それで近所の民生委員の方とお会いしたときに、「今年から民生委員・児童特殊部会というものができたのだけど、民生委員の仕事としてはお年寄りと一緒にお食事会をしたりはしているけれど、児童とのかかわりが全然ないから、少しお手伝いをしている子ども文庫の子ども会の中で山歩きをするときに私も一緒に参加してその地域の子どもたちとも触れ合いたい」と一緒にお話をしました。でも私が住んでいる地域の民生委員はどういうお仕事をされて、私たちとどのようなかかわりを持っているのか、どこに住んでいるのかが全然分かっていない状態なので、もう少し地域全体にアピールをしてもらいたいと思います。

○田中会長
　瀬戸委員は高知市ということですね。多分高知市民の大多数はそう思って、高知市社協はどこにあるか大多数の人は知らないと思います。そういう状況で、あるいは上田委員が先程おっしゃったように、「社協のできない部分というのはなぜなんだろう」。あるいは瀬戸委員のように「そもそも民生委員、社協はどの人？」は大多数の市民が思っていると思います。多分今日おいでの和田委員、中平委員、高橋委員、浜永委員は社協や民生委員の頑張られている地域ではないかと思いますので、どうもあまり見えてこないのではないかというお話、あるいは理想と現実が違うのではないかということについて何か（ございませんか）。それは次のボランティアの育成ということにもかかわってきますので、何かお願いしたいと（思います）。

○中平委員
　そしたら先に社協で働く者として、個人的な意見として言わせていただきます。1つは組織としてどうかという問題があると思います。社協はやはり公共性が強い組織ゆえに自主性が発揮できるのかどうかというところが大事な部分かな（と思います）。2つ目としては従事者としてどうなのかというのがあります。田中会長の資料の中にも地域福祉コーディネーター、保健師、医師、看護師と並べてあるのですが、果たしてわれわれ従事者がその方々と同じレベルで話ができる力量があるのかどうなのか。これも個人の努力の問題。組織の職員の育成のあり方にもかかわるかと思いますが、そういう問題もやはり疑問が残る点として挙がります。最後にはそれぞれの社協でもいろいろな活動をやっていますが、今お話があったようにPRが下手だということもあると思います。それからデータの保管・管理などが非常に苦手です。これも過去から言われています。どういう医療機関でソーシャルワークをやってもデータはすごく残っていくはずなのでが、ここが少し弱いかなというところで、手前味噌ですが、宿毛市社協では毎日日誌をつけています。全員が受けた相談が正確には5時15分まで勤務ですが6時くらいになるとグルグル回り出して、人が書いたものもその後に私が書き足して自分の判をついて、全員の判がついてから帰るということを4月から始めました。やはりこのデータの管理ができていないからPRができないのかなとすごく感じています。おっしゃるとおりPR不足というのは明らかかなと思います。

○和田委員
　私も行政の職員として同じフロアに社会福祉協議会があるわけですが、平野委員、浜永委員であるとか、今、中平委員が言われたことは本当にそう思うわけです。私が行政の職員として社協に対していつも思っていることは、本当に社協の仕事が目に見えない。いつも社協の職員に言うのですが、例えば行政の職員と違ってかたちとして見えるものがない。だから地域へ行ったときに地域のお年寄りが「この間はありがとう。またよろしゅう頼むぜよ」とそういうふうな声をかけてくれることがやはり社協の職員の喜びではないかということで。それと介護保険が始まった。市町村合併であるとか社協の広域化うんぬんの中で、特に市町村は財政が厳しい中で（社協は）自主財源が非常に乏しいわけですから、市町村からの補助金でやっている部分があると思いますが、そういうときにやはり社協が今これだれのことをやっているということを見せておかないと「非常に将来的に……」という話もよくするわけです。先程PRが乏しいという話もありましたが、土佐町では毎年、仕事始めの日に役場の職員が全員集まりしてその年、あるいは翌年度の課題

の事業であるとか、課題のことについての3、4名の職員からの発表があります。やはり社協は地域の人からは役場の職員と同じような見られ方をする部分があるわけです。社協はいろいろな懇談会では民間だという話もしていますが、役場の職員についてもそこは十分理解していない方もまだいるわけです。ですから今年、時間は短かったのですが、社協の職員に「社協がこういうかたちで取り組んでいる。今後どうしていくんだ」と社協が取り組んでいることを（役場の）職員に話をしていただきました。やはり今社協はいろいろな意味で地域なり行政にPRしていかないとこれから先大変ではないかと私は思って応援しています。

○田中会長
私が伺う限りでは土佐町社協はものすごく頑張られている所ではないかという気がします。それでもなおかつPR不足だというご意見ですが、どうでしょうか。

○浜永委員
社協のことを知らないと言われると一番頭が痛いのですが、私は日高村が六千何百人という人口があれば、その全住民に対して必要なことがあれば何でもできるというのが社協ではないかと常に思っています。今までは民生委員、児童委員、社協もどうしても高齢者の人口が多いので、高齢者に偏っていたかも分かりませんが、児童の問題、母親の問題、いろいろな層の問題でも、それから住民の福祉の問題だけでなく、災害も含めて防災、生活の問題、いろいろな問題にかかわれるのが社協ではないかと思います。それも民間ですので公的な部分も確かにありますが、やはり大きな意味で考えたNPOと私は考えていますので、自由にいろいろなことができる、やりたいと思ってずっとやってきました。
社協の職員はどこも非常に少なくて、職員で全部やろうと思ってもなかなかできません。それを人がいないからとか、お金がないからと言ってしまうと全く何もできないと思います。また、何もかもやろうと思ってもそれもまたできないと思います。今、自分の村、町には何が必要で、今何をしなければならないのか。社協ではない別の所ができるものであればそれは民間の業者であろうが、ほかの機関、いろいろな団体がすればいいと私は思います。日高村で考えたときに、送迎サービスとか配食サービスもやってきましたが、それをいつまでも社協がやっているというわけではなくて、今、このサービスが必要だ、こういう問題を解決するためにこういうものが必要だ、こういう事業が必要だというものを常に考えられる。そして地域の問題を把握していけるような地域での座談会、地域へ入っていくといったことをしながら、その中で社協が今やらなければならないことを考えていく。そうすれば社協が必要であるということになるのではないかと思います。今後これが「日高の社協はいらん」と言われるようになるかも分かりませんが、やはりそういうことを考えていかなくては社協でなくてもほかの所でもできるのではないかというふうになってくるのではないかと思います。

○田中会長
非常に重要なご意見で、必要に応じていろいろ連携しあっていけばいいということで、おそらく次の議題にもかかわっていくのではないかと思います。

○高橋委員
民生委員の仕事が見えないと思われているのが、私たちにとっては本当に一番悲しいことです。地域性もありますので、葉山村のように小さな集落でしたら、大きな私が走っていると、「あっ、民生委員が行きゆう」というのがすぐに分かるのですが、高知市や須崎市のように大きな所はなかなか活動が目に留まることも少ないのではないかと思います。葉山村は誰かが何か声を出されたことによって3人は動かないかんと社協から教わっています。1人は近くの人が声をかけると近くの人が動く。それと民生委員が動く。それで社協が動く。支援センターが動くというふうに、困ったときに手を差し伸べる、声をかけるというのは必ず3人と教えられています。また支援センターから「支援をさせていただきましたよ」ということになると、またそれが逆に回っていくという仕事もさせてもらっていますので、地域性というのが一番感じるところです。高知市の方はもちろん新興地であったら特になかなか活動も見えてこないでしょうね。今、介護保健が始まりましたので、お年寄りに関しては結構肩の荷が楽になったかな、支援センターにつないでいくことで答えが見えてくるかなということがあるのですが、その反面、児童問題はなかなか長丁場でたえず声かけ（する）とか、近くの人にお伺いするということは長い時間かかってくると思います。

○田中会長
葉山では3人が動くということで、近くの人、民生委員、あるいは社協、支援センターが連携されながら積極的に活動されて、おそらく住民の方も民生委員の存在はよくご存じではないかと思います。
特にこのリーダーの発掘と育成ということで申しますと、当初からいろいろなご意見をいただいていますように、だいたい地域の中からなるべく自然なかたちで発掘していく、住民自身が自分たちで選んでいく、地域のことをよく分かっている人というご意見もありました。地域にはどんな課題があり、どんな人がいてどうすればいいのかということについて、大筋でやはり分かっているような人になっていくのかもしれません。あるいは組織との関係で言われましたように、トップばかりを意識するのではなくて、住民が得意なことを持たれているわけですので、役割分担をしていけばいいわけで、トップということを意識しないかたちでやっていくということ。あるいは関心のある活動をやっていく中で自然にそういうものができていくのではないかということ。あるいは「生物的に」とおっしゃいましたように、ボランティア、NPOのようにアメーバー的と言いますか、自然発生的に生まれて場合によっては問題が解決して消えていく場合もあれば、さ

らに大きくなっていく場合もあるということ。やはり地域を多くの住民が見つめる中で、より多くのリーダーになる人が出てくるのではないかということかもしれません。

ただあまりリーダーということを意識しなくてもいいのではないか、あるいはしていないというご意見もありましたように、これは私の個人的意見ですが、リーダーというよりもキーパーソンという表現のほうがなんとなくしっくりくるような（気がします）。リーダーというとどうしても「指導する人」と「される人」という関係になってしまいそうで、いろいろな人がそれぞれ役割を持ってそれぞれが持ち味を持って輝くということで言えば、こういうことならこの人、こういうことならこの人がいろいろ知っている。その人がヒントを発信しながら周りもみんなで対等に関係をつくっていくといったことが考えられるのではないかと思いました。これは別に何か1つに固めるということではなくて、今いただいたご意見を基に全体的にまとめていきたいと思います。

（休憩）

○田中会長

続いて④のNPO、ボランティアの地域での育成及び支援という検討課題がございます。（事前アンケートを）簡単にご紹介しますと、板橋委員は、学校、町内会との連携や組織の意義と啓発。上田委員は若者や子どもたちを巻き込んでいく。新宮委員は、社協を核として育成、支援していく。瀬戸委員は全体で研修をすることや参考として子ども文庫を開設して児童の健全育成を図ったという事例があると。それから私の場合はまず課題というようなものがあるのではないかということで、いろいろと活動が多様化する中でやはり本来的な特質や社会的使命を維持するのか、やはり地域によってNPOやボランティアもそれぞれのスタイルがあるのではないか。若い世代がそういった活動にどう取り組んでいくかを考えていく。場合によっては活発な活動をされている所でも視野が狭くなっている場合もあるのではないか。あるいはほかの組織との連携の弱さというものもあるのではないか。それから人づくりや資金の問題もあるのではないか。これは後のほうにもかかわってくるわけです。それでやはり日々、住民と向き合う中で行政や民間企業が（提供）できないようなきめ細かなサービスを担うということで、自発性や先駆性などいろいろな要素が考えられるということ。それから市街地、例えば高知市のような所だと組織的なNPO活動も考えられますが、地域によってはあまり取り立てて組織ということを意識しない中でのかなり自然なかたちでのボランティアが活発に行われている場合もあるのではないか。

それから若い世代に対しては、「どういうボランティアをしてみたいか」というような投げかけが1つのきっかけになる。これは土佐町の社協に教えていただいたことですが、高校生なんかも参加する。あるいはイベント的なかかわりから始めるというのも1つではないか。あるいは大学の学生などもそうですが、ボランティアをしたくてもどこにどう言えばいいのか分からない。方法が流通していないという問題もあるのではないか。そういったことでイベント的なかかわりなどから始めていくにしても、理想的に言えば「ボランティア」ということをみんながロ々に言わなくてもいろいろなかたちでの活動が動き出すというのが自然なかたちではないかということもあります。あるいはいろいろな連携とか多機能化ということや、このNPOならこのNPO、このボランティア団体ならこのボランティア団体というかたちで、それぞれ個別には頑張られていても地域全体をどうしていくのかという連携の弱さもあるのではないかということもあります。ボランティアですと地域の中からニーズを抱えて出てくる、サービスを紡ぎ出していく。それに対して社会福祉法人の場合ですとサービスを当てはめるという側面もあるわけです。当てはめるだけではなくて地域の中から紡ぎ出していく。あるいは社協の場合では、地域の中に入っていかないといけないということが盛んに言われますが、積極的なボランティア団体やNPOは地域の中から出てきて非常に活発にされる。そういった相互が学びあったり連携していくということも必要ではないかと思ったりします。

玉里委員はやはりNPOの重要性は行政よりも地域住民のほうが感じている。あるいは社協が取りまとめていく（ということ）。中平委員は現状についてということ。浜永委員はコーディネーターの役割、あるいは情報収集のあり方ということを言われております。平野委員は座談会や聞き取り調査などを通じてまずニーズを把握する。それからその地域にあったサービスを生み出していけるように情報発信していく。そういったことを通じて住民から活動が生まれていくように仕掛けていく。福祉だけに限らないということをおっしゃっています。松本委員は「NPOを組織しましょう」「ボランティアに参加しましょう」という育成は必要なしというご意見です。幼少期からの心の教育こそ重要であるということです。それから法人格を取得したNPOについてはスキルアップの機会などが必要になっていく。こういったご意見が出ております。さらに相互にいろいろご意見を交換していただいたらと思います。

○松本委員

地域性が非常に出てくると思います。個人のボランティア以上にNPOになるとよけいだと思います。運営委員をやらせてもらっていますが、高知ボランティアNPOセンターで郡部にセミナーで行くのですが、NPOかNHKか分からないようなレベルの中で「NPOを組織しましょう」と言っても、はっきり言うと「それはどうだよ」というところです。田中会長の（意見の）自然にやっているボランティアをわざわざ組織だってやらせる必要性が本当にないと思います。それで自然ならそれでいいと思います。例えば田舎で法事があるとすると集まってみんなで台所に立って、法事の食事をつくるというかたちになりますけれども、市内の人間から考えてみたら立派なボランティアですよね。（他）人の台所に入ってみんなで食事をつくるというのは。そういうのはやはり地域性があると思うので、そこら辺が1つの文章で縛り上げてしまうのは少しおかしいのかなと思います。その辺を自由にできるようなかたちのものをやはり考えておかなくてはいけないのではないかと思います。

それからNPOは基本的に自由、ボランティア自体が自由なので、そのボランティアが集まってきて組織化したらNPOになるのですが、NPO自体の管轄をどこかがしなければいけないのかという話になってくるとこれもまたクエスチョンマークなんですよ。行政に申請をして法人格をいただくわけですが、法人格を取った以上は決算をして報告もして、これだけの税金を納めていますとやらなくてはいけないのでしょうが、法人格を取る前の段階のNPO。法人格を持っているか、持っていないかだけで、法人格を持たないNPOもあるわけで、その辺が「NPOです」と言っていると「ちゃんとやれよ」と言われたりもするし、だからといってそんなにきちきちやらなければいけないものなのかというような、その境の作り方というのは多分今実際にNPOでやっている人間の中でもあると思います。

実際にうちでも今年の1月に法人格になりましたが、最初にやろうとしていたことはこんなことではなかったような感じに思えてきたりして、やっていることがだんだん大きくなっていったので、学校との絡みとかいろいろなことがあって法人格を取らなくてはいけないということになって取ったのですが、「何か最初にやろうとしていたことはこんなことじゃなかったぞ」と。もともとOB会の発展的なもので、「みんなで楽しゅうやろうや」と言っていたものが「何か縛りができてきたね」となってきてその辺がもう少し考えないといけないと。それは多分本人たちの問題であるんだと思いますが、こういうふうなかたちでガイドラインをつくろうとなったときには、何か余裕を持たせられるようなことを考えておかないと、「NPOですといったらこれだけのことはしなさい」と、ピシッと決められてしまうと本当に画一的なものになって何もできなくなるのかなと（思います）。逆に育たなくなるような気もして（います）。「支援しましょう、支援しましょう」と言っているんですが、あまりにもNPOという言葉にこだわりすぎると逆に育たないという気もするのでその辺を少し考えたほうがいいかなと思います。

〇田中会長

重要なご意見で、NPOが場合によっては性格が変わってしまうといいますか、柔軟性、自由な発想が組織立ったものになってしまって、場合によっては社会福祉法人や行政と似たようなかたちになる。社会福祉法人も広い意味でNPOですが、今おっしゃっているのは草の根的なNPOをイメージされているのだと思います。それで当初のイメージが崩れてきているという重要な意見です。地域性というご意見もいただきましたので、いろいろな地域からいらっしゃっていますので、必ずしも1つの方向ではないと思います。自分たちの地域ではこういったかたちがあるとか、自分の所はこういうかたちがあるとか、さまざまなご意見をいただけたらと思います。

〇浜永委員

私が書いた「コーディネーター」は、けっして社協の地域福祉コーディネーターとかボランティアコーディネーターという意味だけでは書いたのではなくて、私は社協の職員ですがプライベートで別の活動もしています。その活動をするときにコーディネートをしてくれる人はいろいろな所にいるわけです。社協の部分であれば私がという部分もありますし、ほかの職員がすることもありますが、朗読のボランティアの活動をしていますので、この中にあまり施設のことがなかったのですが、施設の中で例えば録音をしてもらいたいとかいうような活動が来るわけです。そのボランティアの担当の職員が施設にいるわけです。地域の中で施設の中にボランティアの担当の職員がいて、その人が間に入ってくれて私たちの活動をコーディネートをしてくれる。それからイベントとか。学校の授業に行ったり、図書館で活動するときには、学校の中の先生であったり、それから教育委員会にボランティアのコーディネーター役の方がいるわけです。これは社協だけのコーディネーターの役割という意味ではなくて、活動の支援をしてくださる方はいろいろな機関とか団体、施設も含めてそういった所にいるのが、非常にいい方向に活動がしやすいと日ごろ感じています。情報の収集とか提供などもそういった人を通じてお互いにやっていますので、そういったところを書かせていただいたことです。

〇田中会長

社協だけではなくて施設や学校の中にもそれぞれコーディネーターがいらっしゃる。そういった人たちと連携していくということが考えられるのではないかということ。先程の検討課題にも少しかかわりますが、施設というお話も出ておりますが、新宮副会長どうでしょうか。

〇新宮副会長

老人ホームですのでボランティアを受け入れる立場になります。一時、ボランティアコーディネーターを置いていたことがあるのですが、そのときの経験を言いますと、やはり来られたときにこの方がどういうふうなことをしたいのかとか時間をかけて聞き出すと、うちに来られたボランティアは「そこまでは考えていないけれど、施設に行って何かをやりたい」というときに、「あなたはどういうことができますか。何をなさりたいですか」と根ほり葉ほり聞いた結果、だんだんいらっしゃらなくなったというのが現状です。結局最終的に希望があった場合には、私が主に受けていろいろコーディネートさせてもらっています。何か分からないけれどもボランティアしたいなという衝動に駆られて来ていただいた方にあまりにもコーディネートしすぎると反対にやりづらくなったのかなと反省しています。

〇浜永委員

私のイメージでは施設に担当の方がいて「いついつ、ボランティアが何人です」とか本を持ってきて「これを録音してください」というのがどんどん来るわけです。逆に施設の側から担当の人がいて、ボランティアのグループとかボランティアの人に募集のようなかたちで施設から回ってくるもので、そういうようなことをお話しさせていただきました。

○新宮副会長
本来でしたら施設側からお願いしたいと発信してというのは本当かと思いますが、うちの場合は行事をやるときは各種、学校や社協など、いろいろな所に20名ないし30名というかたちでお手伝いをお願いする場合もおおいにあります。そういうときには、もちろん私のほうでコーディネートをしていますが、今のところ施設の中であまり組織立ってということはできていないというのは、課題ではあるのですが、過去にそういうことがあったのでなんとなく躊躇(ちゅうちょ)しているところはあります。

○田中会長
施設も地域支援、あるいは在宅支援ということで、施設のほうからすれば社協に対する思いというものがありますが、社協からすればまたちょっと違う面がある。そういったいろいろな関係機関が地域の中でどういうふうに連携しあっていくかということになるのかもれしませんね。ほかにどんどんご意見をいただけたらと思いますがどうでしょうか。

○平野委員
松本委員から出ている幼少期からの心の教育ということですが、中学校で保育園の職場体験した生徒たちが小さな子どもと接して命の尊さを勉強したということが新聞に出ていたような気がします。(これも)新聞の記事だと思いますが、高知県は子どもを堕胎する率が全国的に高いというところから、命の大切さを育てることを知って成長していくところを書いていたような気がします。そうなるとやはり子どものときから心の教育を地域で考えていくことが必要かなと感じました。小学校、中学校のPTAの中でも保護者は小学校、中学校を経て思春期に入ったときの子どもの性教育という部分にすごく関心があるのですが、どこでそういうことをやっていくかという機会もあまりないので、どこでどういうふうにかかわっていったらいいかということが、お母さん方の小さな会のときには出し合い話で出るのですが、こういう大きな会になると出ないという部分があります。そういう何か自分の関心のある部分から広げていくということが、そういう出し合い話の中から地域の動きをつかんでいくことをやれたらなと、PTA活動をしてすごく感じている部分ですので報告させていただきます。

○田中会長
だんだんそれぞれの委員の持論というか特色が出てきていますね。保育園にかかわる中で児童が命の大切さなどを知っていく。それが自然なかたちでボランティア意識の発達につながっていくということかもしれませんね。例えば沖縄県平良市(ひららし)はボランティアが盛んで有名な所ですが、そこも小さなときから大人とペアになって高齢者宅を訪問して布団干しを手伝ったりしています。あまりそれほどボランティアを強く言わず、「お父さん、お母さんと一緒に行こうか」というかたちで行って、その代わり高齢者からは沖縄の方言を教えてもらうという双方向性があるようです。そうすると学校を卒業しても誰が何も言わなくてもやめないのです。ボランティアとして自然なかたちで一時大人についていった子どもが大きくなって、誰にもついてきてもらわなくても卒業後もずっと継続しているというお話を聞きました。その場合にももちろんコーディネーターがいらっしゃるわけです。そういった児童期のかかわりといったことで、松本委員、瀬戸委員からもう少し何かございましたら。

○瀬戸委員
幼少期からのかかわりは県の生涯学習課で「ブックスタート」が始まりました。去年から1歳半の赤ちゃん検診のときに「あなたの本よ」ということで2冊(の本)を与えるようにしています。その中で講習を受けて子育てサポーターという方が選ばれて、各地域でブックスタートのお手伝いをしたり、赤ちゃんを抱っこしたり、検診のときにお母さんと話し合ったりして、ボランティアのようなことをやっておられております。それから私どもでは、堕胎をする前に子どもを育てることはこの世の中に1つの生命を生み出して、生み出したからには責任を全うしなくてはいけないという親の自覚を考えてもらいたいなという思いがあります。子どもを育てるということはただ楽しいばかりでなくて、慣れていないことから始まりますからいろいろな苦労がお母さんには付きまといます。自分もまたそういうふうに育てられたのだなということも考えながら、小学校、中学校の教育の中でそういうことも取り上げていただきたいと思っております。それがまた生涯学習課では市町村のPTAの依頼を受けて父親を対象にした、「家庭における父親の役割」という出前講座をやられていると聞きました。今の子どもは痛さ、つらさ、辛抱強さが実感としてあまり伝わっていないのではないかと思いますので、無理にそれを伝わらせるというのはおかしい話ですが、やはりどういう場合にあっても強く生きていけるという力をつけるのが教育ですので、命の大切さとか生きるということ、お互いの思いやりということも幼少期のときからお父さん、お母さんだけではなくて、お父さんとお母さんが協力して家庭の中で共に話し合っていって、家庭力をつけるということにもつながっていくと思います。

○松本委員
瀬戸委員が言われたことも私も含めてという思いです。心の教育は前回も「家庭で心の教育をしなくてはいけないのではないか」という話もありましたし、やはり地域ぐるみで子どもを育てるというのは今はまだちょっとキーワードとして早いという気もあるのですけれど、(他)人様から受けたものは重いですね。親からもらった恩は親が死んでみないと分からないもので、当たり前のようにして受けているところがあるじゃないですか。他人から受けた恩はどこかで返さないといけないという思いがあると思います。そういうところが足りなくて、何か当たり前のように育っているという感覚が、人様に対して何か自分もできることをやらなくてはいけないという思いに至らないところだと思います。だから必死

になって、何か変な話ですが税金を使ってこうやって会を開いて、NPOはどうだとか、ボランティアはどうだとかいうこともやっていかなくてはいけなくなっているわけですね。

本当は簡単なことだと思います。人から受けた恩だからこそやはり返さなくてはいけないということで、ギブ・アンド・テイクではないですが、そういうふうな中で生まれてくるものではないかというふうに（思います）。とても強い口調ですが啓発ということを大人になった人間にするよりも子どものころから高校生ぐらいまでのときに、「あなたは1人で生きているんじゃないよ」ということを教えるほうが、こういう活動の広がりは早いかなと僕は思います。奉仕活動を1年間義務化するという話がありましたが、義務ではああいうものは（身に）つかないと思います。自然と教わっていく。義務で労働を1年間やらせるくらいだったら自衛隊に1年間行ったほうがよほど人のために働くということを体に染みつかせてくれると思うので、そのほうがよほどましだと思います。だから本当に義務でやらずともすむこと、小さいときからコツコツ重ねていって、「あなたは1人で生きているんじゃないよ」ということを教えていく。それも家庭だけではなくて地域とか学校とか、いろいろな所でそういうことを植え込んでいくという。いい意味の洗脳をしていったら自然とこういう活動は広がるのではないかと僕は考えています。

〇田中会長

ボランティアの原点は思いやりであって、その思いやりはやはり小さいころからの教育ということが本質的に重要ではないかというご意見ですね。ほかにもいろいろな角度からボランティア、NPOの育成支援ということでどうでしょう。私が学生を見て、本当にこの学生は全然人のことを考えていないような学生でも、場合によっては少しきっかけをつくれば「ああ、この学生でもなんか見直した」というようなことも結構あります。どんどんご意見をいただいたらと思います。

〇平野委員

商店街を活性化するということで、今度は地場産業の元気回復という部分で、県社協の事業ですが「障害者の日の集い」を今までは高知県、高知市の福祉交流プラザで開催していたのですが、今回は広域へ出ようということで、須崎市で開催しようということで今度実行委員会をつくって立ち上げるところです。その中に須崎市の商店街を活性化させようという部分でのボランティアということで手挙げ方式でやろうかとか今検討しているところです。その中に商店街を活性化させようということを1つの目的にして、商店街から企画を寄せてもらうようなことを考えてみようということが出ています。地域の商店街や商工会を活性化するような部分も地域の育成の中で必要ではないかと感じています。高知新聞にも帯屋町商店街の活性化のことがいろいろ出ていましたが、そういうことを含めて、やはり元気になるためには商店街の活性化ということが地域福祉の中にも必要ではないかと考えています。

〇田中会長

地域の中で「これは」という重要なことを、問題提起してやってみようじゃないかということを誰かが言い出して、それで自然に輪できていくようなそういう問題関心型のボランティアというものがあるのではないか。あるいはそれが非常にやりやすい、楽しみながらやっていけるということにつながるのではないでしょうか。

〇和田委員

平野委員に少し聞きたいのですが、土佐町では各中学校を福祉推進校というかたちで社会福祉協議会が指定して、金額的にはごくわずかですが、経費を出して学校のボランティア活動を若干支援していますが、そういう福祉推進校の県下の取り組みはどこもやられている事業ですか。

〇平野委員

この制度は昭和30年代からずっと福祉教育を推進するということで学校を指定して事業を実施しています。現在は県指定と併せて市町村指定ということでボランティアの推進をやっていますが、今まで1校10万円というお金を出して単年指定していたのですが、どうしても学校が10万円のお金を使い勝手のいいお金と理解されて事業をしていましたので、どうしても学校の中だけになってしまって地域での活動が弱かったのです。ですから今度は地域指定校という校数ではなくて、地域指定ということで市町村を指定して、市町村の中で改めて社協と地域と学校と1つのネットを張って事業を進めていこうということで国で協議をしているところです。そういうふうに学校の中だけではなくて地域へ出て動ける事業として動こうとしています。

〇和田委員

分かりました。ありがとうございました。やはり小学校、中学校という中でかかわっていく、勉強していくということが、先程松本委員の話にも出ていましたが非常に大事なことではないかと思っております。ボランティアの活動もいろいろなイベント的な、単発的な事業については20代、30代の方の参加があるわけですが、比較的高齢の方のというのが土佐町での日常のボランティア活動ではないかと思っております。具体的に言いますと、土佐町には精神障害者の作業所があるわけですが、昨年の12月13日に上田委員に来て講演をしていただいて、ボランティア組織の立ち上げもしました。3つの町で七十数名ということで、だいたい1日2、3名の方が作業所へ来てボランティアとして活動していただいております。やはりその中で障害者との触れ合ったり、そこへ出てきてかかわることで、ボランティアの方も楽しみにして生きがいも持ってきていただいています。やはり目的意識を持ってボランティアにかかわっていくことが非常に

大事なことではないかと思っております。いろいろなかかわり方はあると思いますが、そういうところが非常に大事ではないかと思っております。

○田中会長
若い人のお話もありましたけれど、上田委員何か。

○上田委員
うちの病院の患者に交通事故で下半身だけ麻痺（まひ）した35歳ぐらいの車椅子に乗った方がいます。その方の3歳くらいの姪っ子が（お見舞いに）来ます。その患者は独身なので子どもはいないのですが、その姪っ子はすごくおじさんっ子だったわけです。その患者のお母さん、姪っ子からいうとおばあちゃんになりますが、おばあちゃんとその子が帰るときに私の部屋に寄っていたときに、おばあちゃんにそのおじさんの名前を言って「○○君は、頑張ってリハビリをしてだいぶできるようになったけど、どうしてもできんことがあるき、おばあちゃん助けちゃってよ」と言うらしいのです。車に乗っていて途中でお地蔵様を見たら手を合わせて「○○君の足が動くようになりますように」とか。その3歳くらいの子どもがそうやって誰から何を聞くわけでもないけど、おじさんを見ていると自然に大人をはっとさせるようなことをすごく言っているのです。
私はいろいろな所に講演に行ったら、子どもたちの素直に響いてくれる心が感じられたとき、すごく子どもたちの純粋で本当にきれいな気持ちが大人の何かを感じたときに、子どもなりにそのときだけかもしれないけれど、動いた心があるというのがすごくうれしく感じます。この子が将来的にどういう子に育っていくだろうかと（思います）。うちも「ぱせりの会」というサークルをしていますが、そこにも子どもを連れてくる人がいて、もちろん全然障害のない子どもですが、普段そういう仲間にいっぱい触れているので、この子が将来どういうふうになっていくのかなとすごく思ったりします。先程言われたように「親になったら責任がある」ということで、私はまだ親になっていないから自分が子育てをするという体験をしていないのですが、うちの患者さんを見ていても家族がいることで支えになる部分とわずらわしい部分の両方あるなと（思います）。天涯孤独な人間は、ある意味家族のいろいろな問題にぶつからないことで楽なのかもしれないと考えさせられるようなこともあります。
でもやはり子どもは親の思うように育つものではないなあとすごく感じます。その子どもが「自分のやりたいことがあるんだ」と親に言ったときに、親は心配をしていろいろ言ったりしても、やはりその子がやりたいということをやらせてあげたいという気持ちはありますね。そういう意味でいうと「今の中学生、高校生は夢を持たないで困る」と先生が言うのですが、夢を持てない子どもになっているのは何があるんだろうなと思ったりもします。講演に行ったときの感想文が返ってくるのを読んだときに、「自分は今まで生きるということがどういうことか考えたことがなかった」という子もいたり、「友達が病気で死んだ。生きるということがこういうことだったんだ」と。すごくそういう意味でいうと、小さなときから徐々に育っていく子どもの人生の中でいろいろな節目でいろいろなことを感じていけるという子どもたちはやはり豊かな子どもになっていくんだろうなと（思います）。
私は子どものころにボランティア活動はしたことがないんです。栂原の田舎でボランティア活動を周りの人たちはしていたのだろうかというのも全然分からないくらいでした。でも今度生まれてきたらボランティアは子どものころからやっていきたいなあと今周りを見ていて思います。やはりいろいろなことを子どもたちに体験させるというか、そういう場面に出くわしたときに子どもは自然に感じてくれるなあという子どもの偉大さをすごく感じました。

○田中会長
上田委員から小さいときからの体験の重要性の非常にいいお話を伺いました。それからボランティアは自然なかたちで生まれてくるのではないかということになるのではないかと思います。

○玉里委員
NPOやボランティアは言葉としてだいぶ市民権を得られてきたと思います。初めに松本委員が「NPOをNHKと間違えて」という話がありましたが、その後平野委員からPTAという言葉が出てきますが、英語を知らなくてもPTAと聞くと誰でも親と先生の組織と分かりますね。今はNPOを知っている意識の高い人だけのもののようなイメージもありますが、これからはおそらく市民権を確実に得ていくだろうと思います。言いたいのは、何か特別なものではないという雰囲気づくりが（必要だと思います）。嶺北でアンケートをとりましたが、今はまだ集計中ですが、ボランティアは無償で志の高い人がするものということにパーセントが高くありまして、そうなのかなというふうにある意味驚きました。先程からやる必要はないんだということも出ていますが、やはりまだ自然かたちでの啓発が何か必要なのかと思います。

○田中会長
自然なかたちというご意見でしたが、地域によって例えば社協サイトなりボランティアの育成支援、あるいはNPOといっても地域によって受け止め方が違うのではないかということですが、そういったボランティアの育成支援やNPOへのかかわりについて自分の地域ではこういう感じだといったご意見はないでしょうか。

○松本委員
ネットワークとか国際交流という言葉がよく出てきます。私は国際交流の団体をやっていますが、老人介護の団体であったり、障害者の支援を「ネットワークさせましょう。ネットワークさせないと本当のかたちをなさないのですよ」という

ことで言われることもあるのですが、でもこれはなかなか難しいと思います。自分はどうか分からないのですが、それぞれがやりたいことを強く思って団体を立ち上げてその枠の中でやっていて引っ張っている人はカラーが結構濃いんです。だからそのカラーの濃い人同士が集まって、「さあ、何かやりましょう」と言ったってなかなか同じ方向を向かないと思います。それこそ本当に自然発生していくくらい待っておかないといけないのかなと僕は思います。例えば地域でこの辺で何かに（分野の）枠を飛び越えてやろうと言い出すまで待たないと、誰からであっても「ここでネットワークを組んだらうまいこといくんじゃないか」と言って「ネットワークを組みましょう、組みましょう」とつくっていってもなかなかこれはうまくいかないと思います。やはり分野の枠を越えるときとか、団体の枠を越えるときのネットワークはあまり触れないほうがいいのではないかという感じがします。僕の思いというものもあるのですが、今NPOセンターでは幡多で（ネットワークを）組んでいるんですが、それは本当にどちらが先だったということもないのですが、「なんか幡多のほうは元気がえい」「それならネットワークを組んでみるかよ」と言って県西部のNPOの支援センターにしていこうかという話も徐々に上がっていくというかたちでやっているので、そういう感じでやっていかないと、「ここにつくりなさい」と言ってやってやるものではないのではないと僕は思いました。多分（ネットワークを人工的につくろうとすると）空中分解する確率が高いと思います。

〇田中会長
　どうしても言っておきたい人は、いらっしゃらないですか。

〇新宮副会長
　子どものときからの教育ということですが、うちでも保育園と交流を持っています。保育園の中で「100歳の歌」というのを覚えているんです。実際にうちは100歳の方がいらっしゃると「へえーっ」という感じで体験しているんです。「歌だけで聞いていた人が現実にここにいるという。もうおばあちゃん100歳」とすごく尊敬してくれます。周りをみんなが囲んでという。そういうふうにだからボランティアとか来てくださることがうちにとってはボランティアなんですが、その子たちはボランティアと思って来ているわけではなくて体験しているというのがずっと積み重なっていって。小学校も来られます。小学校は郡部からで2時間くらいバスで来られるのですが、その来られるときにはメッセージをすごくたくさんつくってくださって、うちでもずっと飾ったままですが、「長生きしてね」とかいろいろな格言を一生懸命勉強して書いてくれていると思います。
　本当にボランティアと思わないで触れ合っていることが非常にボランティアになっているということであれば、小さいときからの教育は非常に重要だなと思っています。それで中学生になった子がお掃除ボランティアでうちに来てくれて、高校生になったから止まりましたけど、それは小学校のときからの体験とか、中学校に入ったときの触れ合い1日体験授業とかいろいろそういうものがありますが、そういうところで施設に入ってきて、「では、おばあちゃんの所へ行ってお掃除してこようか」という自然な思いで来てくれたのではないかと思っています。段階を追って見ていると、小さいときからの教育は非常に重要だなと思います。

〇田中会長
　これで終わってもいいのかという思いもありますので、次回に継続したいと思います。今非常に自然なかたちでのボランティアということが何人かの委員から出ました。これは私の間違いかもしれませんが、社協サイドから言うとどちらかというとボランティアの育成支援を意識的にやられていると思いますが、今のご意見に対して何かございませんでしょうか。

〇中平委員
　私、個人の考え方としてもやはり「幼少期からの自然なかたちで」というのは、本当に理想的ではないかなというふうに思います。ただそういう体験がないままに成人をされた方も多いのが現実です。先程、ご意見にもありましたようにボランティアはしたいんだけど自分は何をしたらいいのか分からないという方も非常に多いです。そこをいかにコーディネートしていくかというところが業務的には非常に悩むところです。それは施設の皆さんとも協議をしながら、ご本人がどういう方なのかということもよく分からないままに見極めながらつないでいくケースもあります。ただ大事なことはそこできっかけというのは何かしたいということでいらっしゃっているわけですから、それをどなたかのご発言にもありましたように「目的意識が持てるような」とか「何かの次の行動にするような動機付け」にしていくというところをいつも考えながらはやっていますが、具体的に言いますと非常に難しい作業です。冒頭に田中会長の沖縄の事例がありましたが、子どもが継続的にそういうふうなことをやっていることも広く伝えていく。動機付けと同時にこういう意義があるんだということももっとわれわれの立場としては前面に出していって、活動に対するものを皆さんにもっと違ったかたちで見ていただけるような工夫も、自分たちとしては足りないかなと考えています。

〇田中会長
　一定の動機付けといったことも必要になることもあるだろう。これは後の検討課題にもかかわることです。平野委員、浜永委員、社協サイドから（ボランティアを）見た場合どう考えられているか（お話いただけますか）。

〇浜永委員
　やはりボランティアですので、まず自分で何かをしたいと感じてもらうというか、行動にというのが自然的な流れで、

社協としてはそれをつなげるとか、広げるということになってくると思います。ただ来週こういうボランティアが5人いるとか、例えば最初に言いましたように施設の方で本を持ってきて「これ、テープに録音してください」といきなりきたときに、誰もする人がいないということではいけないので、そのためにボランティア養成講座をしたりして、ボランティアを育成するという部分は確かにあります。自然にと言いましても自然を待っているわけでもない面もあります。必要なものの養成講座、例えばデイサービスボランティアの養成講座も社協としてはやっているのですが、ただその養成講座をしたからボランティアが育成できたということではなくて、せっかくやりたいという気持ちができた人を、ではどういうふうにつなげていくか、またその活動を広めていくかということが社協がやらなければならないところかなと思っています。せっかくの思いや活動が生きていくようなことを考えているわけです。

それから福祉教育では、子どもだけではなくて大人に対してももちろん福祉教育はやっています。特に社協はボランティア募集というようなかたちで知らせていません。何かのイベントをするからボランティア募集ということをやるのですが、去年1年間やってきた福祉教育の中で障害者の運動会のボランティア募集をしました。当日のボランティアを募集したのですが、その前日に私が準備に行ったときに、ある子どもがそれを見つけて「それ重たいき、一緒に運んじゃお」と言ってくれました。それは本当に自然に運んでいるのが重たそうだから体育館へ運ぶのを手伝った。ボランティア募集で来た子どもではなかったのですが、前日に準備に行ったときにそうやって声をかけてくれたということで、私はその子どものことを学校の先生に伝えました。その子どもと私は面識がありました。「あっ、私の知っている人が荷物を運んでいるから手伝どうちゃりたいな」という気持ちが多分その子どもにできたのだと思います。

それと去年、テレビで「ちょボラ（ちょっとしたボランティア）」をやっていて、ある人が、その方は大人の方ですが、「ちょっとほうき貸して」というので何をするのかなと思ったら福祉センターの駐車場が汚れていたので、そこをほうきで「ちょボラをする」って、「ちょボラ、ああ、すごいな」と思いました。テレビでやっているのでちょっとした自分の空き時間があったので掃除をしちゃおうということで、その人は普段ボランティア活動をしているという感じの人ではなかったのですが、そういうふうに自然になってきたので、そういうところも大事にしていかなくてはいけないかなと思っています。ともすれば社協として、ボランティアグループをつくるとか、養成すると日々考えがちなんですが、そういったところも考えながら日ごろの福祉教育というか、意識を持ってもらうような話をしたり、いろいろな活動とか、情報、広報、啓発というところをやっていきたいと思っています。

〇田中会長

どうもありがとうございました。時間を延長して申し訳ありませんでした。非常にいいお話ばかりでした。なるべく自然なかたちで、あるいは子どものときからの体験、交流、教育、触れ合いということの重要性というご意見。それからそういったことは非常に重要であるということを認めつつも、やはり場合によってはきっかけづくり、あるいは意識的な働きかけが必要な場合もあるというこういったご意見もございました。これにつきましてやや消化不良かもしれませんので、次回、補足的に③④に関しましては少し時間を取りまして、まだ言い足りていない、あるいは重要な点が欠けているという点はぜひご意見をいただけたらと思います。皆さん、今日も非常に活発なご意見をいただきましてありがとうございました。 1つ気になっています。どうしても「会長さん」と言われるとちょっと違和感がありますので、これからは単なる司会、委員ということでお願いしたいと思います。